ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

「はぁ、『ＰＴＳＤ』ねぇ……」

　樹葉の腕の中でひとしきり泣いた――こう言うと情けない気もするが――後、俺はレイと詠に同じことを話すと、レイはそんな事を呟いた。ちなみに詠は驚いて声が出ないのか、口を半開きにして黙っている。

「まあ、何かあるとは薄々思っていたけど、何というか、中々に厄介なものを……こりゃ、話辛いわけだ」

「……いや、言い訳はしない。話さなくて悪かった」

「ま、話してくれたんだし、私は別にいいよ。てか、お姉様たちには話すの？」

　レイは心配そうな顔で、俺にそう言う。確かに、この件については話しておくべきか否か、俺はかなり悩んだ。が、

「ああ、話しておくよ。これから先も、ずっと隠し通せるわけがないからな。それに、こういうことは、ちゃんと言っておくのが礼儀だって思うようになったんだ。今更だけど」

　ちなみにこれは完全に俺の予想で、何も確証はないのだが、お姉様はもしかすると、このことについては、実はとっくに知っているんじゃないかって思っている。いや、もっと言えば、マルクスさんや木藤さん、今はいないけど絵里さんも……

「ん？　どったのロラン？」

「ああ、いや。何でもないよ」

　色々と考えていたら、どうやら俺は結構難しい顔をしていたらしい。

　よく考えてみれば、お姉様達がこれを知っているかどうかなんて、あまり関係がないか。これを抱えているからといって、どうこうと何かをするような人達では無いことは、俺はよく知っているはずなのだから。

「……あの、ロラン」

　すると、今まで黙っていた詠が話しかけてきた。何だか、凄く言い辛そうなことを言おうとして、やっぱり言えない、というような顔だ。

　最初、「どうした？」と聞きかけた俺だったが、すぐに詠が言わんとしようとしていることに気が付き、ゆっくりと首を横に振る。

「……別に、いままで通りでいい」

「でも、これからだって……」

「二年間、普通に生活してただろ？　今回のは、たまたま……その、何というか、色々と動揺した結果だったんだよ」

　確かに『ＰＴＳＤ』のせいで倒れたけど、一応『研修所』で治療してもらったのだ。日常生活に支障は出ないと判断してもらったのだから、俺個人としては、『ＰＴＳＤ』を知られてしまったからといって、三人が俺に気を使う、なんてことにはなって欲しく無い。

「間違っても、食事当番とか減らすなよ？　そんなことしたら寧ろ怒るぞ？」

「……分かりました。ロランがそう言うなら、その点は変えません。でも、『気を使うな』ってわけにはいきませんよ？　知ってしまった以上、支えさせてください。また、倒れているロランなんか見たくありませんから」

「……俺としては、別に大丈夫なんだけどな」

「いやー、そりゃ無理ってもんよ。ロランが今まで私たちのことをどう見ていたかはともかくとしても、私たちはロランをずっと『仲間だ』って思っているんだから……それくらいの世話は、焼かせてちょうだい？」

　詠に続いて、レイまでそう言う。むぅ……

「ああ、そういえばさ。二人共、あんまり俺が倒れた理由をしつこく聞かなかったよな？　何でだ？」

　ふと、俺は気になったことを二人に聞く。

　すると、何故か二人は微妙に困ったような顔をした。

「いや、『なんで』って聞かれてもねぇ……」

「ええ。ですよね……」

「ああ、いや。別に責めているわけじゃないんだよ。ただ、よく思い出してみると、二人共、聞きたいのに我慢しているような感じだったからさ。なんか理由があんのかな、って」

「あー……いや、ね。私も聞こう聞こうとは思ったんだけど……何となく、その理由を最初に聞くのは樹葉ちゃんじゃなきゃかなって」

「僕も似たような感じですかね……ロランが目を覚ました時に、ついつい聞いてしまいましたけど、後から『あ、やっちゃった』って思ってしまって……」

「ああ、なるほどね。……いや、『なるほど』じゃねーよ。何を納得しているんだ俺は……」

「あー、分かるよ、その気持ち」

　俺の一人漫才に、苦笑いをしながら同調するレイ。口には出さないが、詠も同じことを思ったらしい顔をしている。

「でも、そういうわけだから、こっちからは聞き辛かったってわけ。納得出来ない？　してちょうだい」

「なんつー無茶を……まあ、説明しろってのも無理だろうし、頷くよりほか無いか……」

　やれやれと溜息を吐く俺。それと同時に、誰かのお腹が鳴る音が聞こえる。

「…………」

「…………」

「……私じゃないよ？」

「お前か」

「レイですね」

「私じゃないって言ってるじゃんっ？」

　時計の方に目をやると、もう一時を回っていた。お腹が空くわけである。

「もうこんな時間ですか……今日の食事当番は樹葉でしたね」

「元々、今日は学校だから、昼食当番はいなかったけどな」

「まさか、樹葉ちゃんが率先してやってくれるとは思わなかったわ。なんか張り切っているよね？　ロランが目を覚ましたから？」

「いや、そんなわけが、あるはずが……ない、と、思う……？」

　言いながら、「あれ？　もしかして？」と思ってしまう自分がいることに気がついて、言葉の最後がなんか疑問形になってしまった。何とも自意識過剰な気もするが、やはり俺が目覚めてからの樹葉はちょっと張り切っているように思える。

　二人は判断がつかないのか、俺の疑問にうんともすんとも言わず、代わりに困ったような表情で樹葉のいるキッチンの方へと目を向けた。

「ま、こんなことは一旦置いておくとして、だ」

　俺は、そこでこの話題を終わらせた。

「お昼ご飯が出来たみたいだし、食べましょ？」

　レイが俺の言葉を引き継いでそう言い終わると同時に、樹葉が作った料理をこっちに持ってくるのが見えたからだ。

「…………」

「…………」

　昼食を食べ終わった俺は、一応「絶対安静」と言われているので部屋にいる……のだが、何故か樹葉も一緒だ。ベッドの上で、日ノ下から借りたラノベを読んでいいるのだが、何だか読み辛い。

　何が読み辛いって、樹葉の視線がさっきから本に集中している……特に、表紙の際どい服の女の子に集中しているのがとっても辛い。勿論中身は健全なので、恥じることなど何もないのだが、それでもだ。

「ねえ」

「……ん？」

「ロランってさ、そういう女の子が好きなの？」

「ぶっ？」

　このタイミングで何てことを聞きやがる……いや、まあ、そう思われても仕方がない気はするのだが……

「……別に、そういうわけじゃない」

「今、なんか間があったよね？」

「そこつっこみますか……」

　ただ樹葉の質問に面食らったから、少し返すのが遅くなっただけなのだが……

「ロランはさ、この小説の中のキャラクターなら、誰が好きなの？」

　樹葉は、いきなり話を変える。ニコニコしているのが、なんか怖かった。

「…………」

　こう聞かれて「いない」とは返せない……が、この小説はテンプレファンタジーっぽく、出てくるメインキャラクターは女の子が多い。何となく、その中から選んだら後が怖そうではあるのだが、だからといって数少ない男キャラである主人公を選ぶというのは何だかわざとらしい気もする。

　せめて、俺の気に入ったキャラが樹葉似ならセーフかもしれないが、生憎そのキャラクターは樹葉とは真逆の黒髪ロングの女の子。性格も樹葉よりかはレイの方に近い。

　……どうする？　どうするよ、俺。

　念の為に断っておくと、俺は別にレイが好き、というわけでは無い。勿論恋愛方面で、という意味だが。

　ただ、ウジウジしている主人公を思いっきり引っぱたいた、その行動と度胸に「格好良い！」と感じて、それ以来、俺のお気に入りってだけなのだ。

　さて……なんて言おう。あんまり悩み過ぎるのもまずそうだ。

　散々悩ん挙句、

「……こいつかな？」

　そう言って俺が選んだのは、主人公のライバルの男だった。ちょっと熱血入った感じの、まあ俺的には好きでも嫌いでもない、だが落としどころとしては最適そうなキャラクターである。

　それにしてもこのキャラ、別に嫌いになる理由があるわけではないのだが、何故か「好きだ」と素直に思えないんだよなぁ……

　そう思ったものの、好きなキャラクターを聞いた樹葉の笑顔から、得体の知れない怖さが消えたのを感じて、俺はホッとする。

「ふーん……どんなキャラなの？」

「熱血的な、脳筋キャラかな。拳一つで敵を倒していく感じ」

「……そのキャラってさ、何だか『闘悟』って人に似てるね」

「……っ？」

　樹葉の言葉に、一瞬俺は思わずそのキャラの挿絵に目をうつす。……たしかに、茶髪天パってところを除けば、あいつにそっくりな気も……

　ああ、なるほどな。

　俺は何だか納得した。このキャラがイマイチ好きになれなかったのは、あいつに似ていたからか……

「ねえロラン」

「ん？」

「本当はさ、好きなキャラって別にいるでしょ？」

「…………」

　何故気が付く……

　俺は、思わず樹葉から目を逸らしてしまった。

「まあ、それは後でじっくり聞くけど……ちょっと別のことを聞いてもいい？」

「あー……なんだ？」

　そう聞くと、樹葉はくるりと俺の視界の方向に回り込んできた。

「闘悟のことは、どう思っているの？」

「……っ」

　どう思っているかを聞かれれば、勿論『嫌い』。そう思っているはずだった。あいつは俺の敵であり、もう二度と、昔のような仲にはなれないだろうという確信がある。

　だが何故だろうか。樹葉の問いに、俺はすぐに返事をすることが出来なかった。

「ねえ、ロラン」

　そんな俺を察してか、樹葉は俺の目をまっすぐに見つめてきた。

「ロランはさ、なんだか無理に闘悟のことを嫌いになろうとしていない？」

「…………」

　そんなことはない。そのはずだ。

　だが、俺は樹葉のその言葉を、否定することが出来なかった。

「あいつとはもう、所属する『チーム』が違う。前みたいに仲良くすることなんて、出来っこないんだ……」

「違うよ。そんなのただの言い訳。だって『チーム』が違くたって、仲のいい友達がいう人はいっぱいいる。そりゃあ、闘悟のいる『チーム』はちょっと特殊だけど、『ワルキューレ』と分かり合える日はきっとくる。ロランは本当は、ただちょっと怖がっているだけで、闘悟のことを嫌いになんてなろうとしていない」

「違う！　俺はあいつのことなんて……！」

「それこそ違うよ！　どんなに喧嘩しても、どんなに相手のことを嫌いになろうとしても、親友だった相手を本当の意味で憎むことなんて出来ない。だって二人で築き上げた繋がりでしょ？　そんなの、簡単に切れっこない。ロラン……一体何を誤魔化しているの？　いつまで自分に嘘を吐き続けているつもりなの？」

「…………」

　俺は、何も言えなかった。きっと、自分でも気が付いていたんだと思う。あいつが名前を変えていなかったという、その事実を知った時から。

　俺は何も知らない。闘悟がなんで『トラース・ブレイカー』に入ったのか、何がしたいのか、どんな気持ちなのか……そして、俺に刃を向けられて、何を思ったのか。

　だから、どう思おうとも、樹葉の言うとおり、今の俺は、あいつを本当の意味で嫌いになれていない。

『これが宿命』

　闘悟とこれから先、ずっと敵同士でいること。「これは宿命だ」と、さっきはそう思ったことが、今は別のことのように思えてくる。いや、もう分かっているのだ。これは宿命なんかじゃない。一度敵だと思っていた相手への怒りが消えて、でも一度決めたことを否定するのが嫌で、無理矢理理由をつけたことを、俺は誤魔化していた。

「……俺は、あいつを傷つけたんだぞ？」

　闘悟の指を切ってしまった場面が、もうずっと前のことなのに、今目の前で再生されているのか、というくらい鮮明に思い出せる。

「あいつは敵だ。そう思わなければ、俺のやったことは……」

　一体なんだったのだろうか。闘悟に怒鳴り散らして、傷つけて、でも結局全て俺の勘違いだった。今更、あいつに「許してくれ」なんて言えるはずもない。

「……分かっている。分かっているんだ。もう、戻れないところまで来たんだって。あいつとの関係をこんな風にしたのは、俺のせいだったんだって。でも、分かったってどうしようもないんだ。だったらもう、このまま進むしかないじゃないか……」

　ああ、そうか。

　俺は心の中で一人、納得する。

　俺が二本の刀を返してもらえない理由。それは、あいつを傷つけてしまったからなのだ、と。俺はお姉様と約束したのだ。「この刀を、誰かを傷つけるために使わない」って。それを破っておいて、「返してくれ」なんて、なんて図々しいことだったのか。なんて愚かなことだったのか。

　そりゃ、返してもらえるはずがない。

「そんなこと、ない」

　そう樹葉の言う声が聞こえてきた。

「私には、二人がどんな気持ちなのか、どんな付き合いだったのか、そんなことは全然分からない。でもあの時、闘悟はロランを、あれ以上傷つけようとはしなかった。遠目から見ていたから分かるけど、闘悟はロランを倒そうと思えば出来たと思う。きっと、ロランと、出来ることなら昔みたいな関係に戻りたかったんじゃないかな？

　だから、話せば分かるよ。だって、ロランだって昔みたいな関係に戻りたいんでしょ？　なら大丈夫。きっと、上手くいくから……」

「……元に、戻れるのか？　あんなことをしてしまった俺と、あいつは今でも昔みたいな関係になりたいって思ってくれるのかな？」

　そう言いつつ、俺は既に分かっていた。こんなことを樹葉に聞いても分かりやしない、と。樹葉も、それを分かっているのか、俺の質問には答えない。

　全ては、あいつと実際に話してみなければ分からないのだ。

　そう思ったら、不思議と気分が、少なくともさっきのように暗いものでは無くなってきた自分に気がついた。許されると決まったわけではない。多分許してはくれない。でも、向き合う決心をしただけで、こんなにも気分が変わるのかと、俺は少し驚いていた。

「ありがとう、樹葉……って、どうした？　俺、何か変なこと言ったか？」

　自然に出てきたお礼の言葉を口にすると、何故か樹葉は涙ぐむ。そんなに変なことを言ったつもりではないのだが……

　こんな時、俺はどう行動するべきか分からず、オロオロとしていたのだが、

「ううん。ただ、やっと昔のロランの顔に戻ってくれた、と思って」

　なんてことを言われてしまっては、俺はフリーズするしかない。

「……今と昔とじゃ、そんなに違ったか？」

　やっと出てきた言葉は、何とも間抜けなものだった。

「うん。でもきっと、自分じゃ分からないと思うよ？　……ずっと見てきた私にしか、私たちにしか分からないと思う」

「そっか……じゃあ、また前みたいな顔をするようになったら、今度はぶん殴ってくれ。じゃないと、多分……気がつくのに、結構時間がかかりそうだ」

「ふふ、そういう役目は、レイちゃんが似合いそうだよね」

「おいおい……そういうのは、嘘でも『詠の役目だ』って言ってやれよ。あいつ、男だぞ？　一応」

　少なくとも、俺の中で男はそういうことをするイメージだ。学生の青春って感じである。

　しかし、樹葉は俺の発言に苦笑い。

「一応って……ロランもひどくない？」

「まあ、確かに『殴る』ってのはレイの方が似合いそうだとは思ったからな。詠は、どっちかって言うと『ひっぱたく』って方がしっくりくる」

「あぁ、確かにね」

「あ、でもこの間、詠からアッパー食らったわ」

「あ、お風呂の時の？」

「そう、風呂の時な。意外とパンチ力あるなって思った」

「えー……詠ちゃんには申し訳ないけど、イメージ出来ないかなぁ。腕細いし、それこそ、ロランが言っていたみたいに『ひっぱたく』って方が分かるかも」

　その言葉には、俺も賛成である。正直、今でも信じられない。

　なんてことを考えていた時だった。

「ところでロラン。さっきの小説の娘、一体誰が好きなの？　さっきの男の人じゃないよね？」

「…………」

　俺は何かを言おうと口を開いたが、結局どうすればいいのか分からなかった。なんだか樹葉の笑顔が怖い。目が「なんで嘘を吐くの？　ねえ？」って言っている気がするが、きっと気のせいだろう。そうに違いない。

　まあ、忘れていたわけではないのだ。どうして闘悟の話をしているうちに忘れてくれないんだよ……なんてこれっぽっちも思っていない。

　しかし何故だろう。このラノベには、それなりに男のキャラクターも出てくるのだが、さっきの樹葉の発言は、「小説の『子』」ではなく「小説の『娘』」って感じで女のキャラクターに限定されていた気がする。いや実際、気に入ったのは女のキャラクターなんだが……

「ねえ、早く教えてよ」

　何故急かす。

「……このキャラでございます」

　観念した俺は、諦めて正直に教えることにした。どうして最初から正直に答えてしまわなかったのか、とか、なんでこんな口調になったんだ、などという疑問も湧いてきたが、俺は分からん。

「……ふーん」

　そう言って、樹葉はそのキャラクターをまじまじと見る。俺は何だか、蛇に睨まれた雨蛙の気持ちで樹葉の言葉を待っていた。

「具体的にはさ、どこが気に入ったの？」

「ん？　ああ、まあ、格好良いって思ったんだよ。弱気になっている主人公に喝を入れるとことかがさ。中々出来ることじゃないじゃん？」

　なんて言ってから、俺は、あははと笑う。我ながら、とてもわざとらしかったと思う。

「……まあ、嘘は……言ってないね」

　ジト目で俺を見つつ、そんなことを樹葉は呟いた。疑問形でも確認みたいな風でもなく、確信を持ってそう思ったみたいだけど、なんで分かったんだろうってのは聞いちゃ駄目なんだろうな。

　これ以上追求してくることは無さそうだったが、危険を感じた俺はこの話題を強引に終わらせて、樹葉と一緒に部屋の外に出た。出た時近くに詠がいて、何故かジトっとした、どこか非難するような目をしていたのは気のせいだろう。多分、樹葉も同じ風に思ったと思う。

　ふと、思ったことがあって、足が止まる。

　どうしたの？　というように、樹葉の足も止まった。

「……闘悟は、どうしてトラブレなんかに入ったんだろうな」

　俺のその言葉に、何故かレイの肩が一瞬だけピクンと動いた気がした。

「何しに来た？」

　やはり、怖い。

　マルクスさんにそう言われ、俺は思わず後ずさりかける。だが、ここで退いては意味が無い。

　俺は今、格技場に来ていた。ヘブンズ・ギアとヘルズ・ギアを返してもらうためである。

マルクスさんはこっちに体を向け、俺を睨んでいる。細い目だが、歴戦の猛者らしい、相手を威圧するような輝きが宿っていた。

　現在、その刀を預かっているのはマルクスさん。怒らせると怖いことこの上ないので、覚悟してきたとは言え、やはり怖い。

「大切な二本の刀。それをどう使わなければならなかったのか、俺はどう間違えたのか、それを言いに来ました」

　震えそうな声をなんとか殺し、俺はゆっくりとそう言った。

「ふざけたこと吐かしたら……分かってんだろうな？」

「……っ」

　叱る時でも滅多に出さない、重苦しさを含んだ低音が俺の鼓膜を揺らす。本能的に逃げたい衝動に駆られたが、俺は舌を噛んでなんとか踏みとどまった。

「……ふん。ビビっているようだが、それでも言いたいことを言う覚悟はあるようだな。聞いてやる」

　どうやら、ビビっているのを隠したつもりでも、マルクスさんにはバレバレだったらしい。

　舌の痺れがとれるのを待ってから、俺は大きく息を吸い込んで、それをゆっくりと吐き出すように、声を出した。

「俺はあの日、感情のままに刀を振ってしまいました。闘悟が、昔の親友が、トラブレに入っていたのが許せなくて、怒りのままに、あいつの指を斬ってしまった。あいつがどうしてトラブレにいるのか、その意味はよく考えたけど、分かっていなかったし、それは今でも変わりません。きっと、俺はあいつと対峙する度に、怒りに任せて力を振るい、傷つけてしまったことを思い出すんだろうと思います。お姉様から、あの刀を受け取った時、『絶対に、人を傷つけない』と約束したのに、俺はそれを破ってしまった。いえ、約束そのものを忘れてしまっていた。そんな俺に、こんなことを言う資格は無いのかもしれません。

　でも、それでも俺はもう一度、刀を取りたい。今度は、樹葉やレイ、詠を守るために、お姉様と『チーム』を守るために、自分の居場所を守るために、そして許されるなら、闘悟への罪滅ぼしのために、力を奮いたい。勿論、闘悟が許してくれるとは思ってないけど……

　だから、お願いします。ヘブンズ・ギアと、ヘルズ・ギアを、お姉様から頂いた二本の刀を、返して下さい」

　そして、俺は頭を下げる。一人でこんなに長々と喋ったのは、多分生まれて始めてかもしれない。

「ロラン。一つ聞かせろ」

　俺の言葉に、途中一切口を挟まなかったマルクスさんは、静かに、そう聞いてきた。

「次、あいつに会ったら、どうするつもりだ？」

「……正直、分かりません」

　その問いに、俺はそう答えた。それが、俺の正直な答えだったから。

　だから、そのまま続ける。

「でも……今度は絶対、いきなり斬りかかったりはしない。あいつが何でトラブレなんかにいるのかは分からないけど……少なくとも、今度はちゃんと『会話しよう』って、そう思っています。

　それでもし、あいつが間違っているのなら……その時は、刀を振るつもりです。他ならぬ、闘悟のために」

「……なるほど」

　マルクスさんはそう呟くと、そのまま奥へ引っ込んでしまう。

「あ……あれっ？　マルクスさん？」

　後を追いかけるわけにもいかず、その場で立ち尽くす俺。また、間違えてしまったのだろうか……と不安になっていたら、マルクスさんはすぐに戻ってきた。

　二本の、長い茶色の包みを持って。その中に何が入っているのか、俺は直感で理解した。

「まあ、まだ不安なところはあるが……少しはマシな気構えが出来たようだし、取り敢えずこいつらは返しておく」

　そう言って、マルクスさんは少しだけ笑顔を見せ、俺にその包みを渡す。

　腕にのしかかるこの重みは、いつ以来だったか……

　茶色の包みを開けてみると、そこには俺の予想通り、ヘブンズ・ギアとヘルズ・ギアが包まれていた。

「明日から、またここへ来い。体も鈍っているだろう。最初は軽い木刀で体を慣らすところから始めるぞ」

「あ、ありがとうございますっ！」

　やはり、この二本の刀が自分のところにあるだけで、落ち着く。

　だから、もう間違えない。

　マルクスさんにお礼を言いながら、俺は改めて、そう決意した。